

BRANDON EASTON

CHLOE FRABONI

世界観監修 Madi Buckingham, Sean Copeland

クリエイティブコンサルタント JEFF CHAMBERLAIN, JASON HILL, GEORGE KRSTIC, ANDREW ROBINSON, ARNOLD TSANG

> プロデューサー BRIANNE MESSINA

デザイン BETSY PETERSCHMIDT

> イラストレーション ARNOLD TSANG

リーパー: 美暦 - スキン&オリジナルコンセプト DAVID KANG

> リーパー: 美暦 - モデル KEOS MASONS

リーバー: 質暦 - 武器モデル DRAGONFLY 🔪

リーパー:オリジナルモデル HAI PHAN

CODE OF VIOLENCE

自分の鼓動が耳の中で鳴り響いていた。レイエスの怒りの感情は、こうした静かなひとときにくすぶる。たとえばパイロットの遅刻だとか、ミッションに関する資料が見当たらないといった些細な出来事。かつてなら余裕のある笑みを浮かべ、軽い冗談で流していただろう。しかし、最近は苛立ちが渦巻き、膨れ上がり、激情へと変貌していく。それはまるで、別のどこかへつながる橋のようでもあった。橋の向こうには一体何が? それについてレイエスはあまり考えたくなかった。引き金を引くたび、肉体が崩れ黒煙と化すたび、一歩ずつそちらへ足を運んでいるような感覚に襲われた。

だが、それこそ力を手にするため支払った代償なのだ。

レイエスはリーパーのマスクを握りしめ、それに映る己の歪んだ顔を見つめた。マスクは白いジャック・オー・ランタンのような意匠で、細く赤いアイスリットがついた特注の呼吸装置だ。今回のような隠密行動が求められる任務では、HUD、ガスフィルター、GPSに接続された無指向性通信装置などが必要になる。それらを踏まえるとマスクという形状はいたって実用的だ。しかし、マスクが必要な理由は他にもあった――彼は、顔を見られてはいけない存在なのだ。レイエスは死んだこ

とになっている。それを覆すわけにはいかない。生きていることは誰にも知られて はならない。特に、「彼女」には。

砕かれた万華鏡のように、記憶の欠片が押し寄せてくる。喜び、満たされ、何か を発見し、愛にあふれていた日々。すりむいた手の甲に滴る溶けかけのアイスク リーム。彼女の髪。慈愛のこもった眼差しで見つめられた時間。

今の俺を見ても、彼女は微笑んでくれるだろうか?

答えは出ぬまま、抑えようのない怒りが全身から湧き上がってくる。いつの日かまた、あの頃のように想ってくれるだろうか?

長年その肉体が歪められていったように、渦巻く怒りはもはや手の届かない領域に到達してしまっている。ジャックとの最後の戦いで受けた傷など、アメリカ政府、そしてモイラの手で注入された毒物に比べればたいしたことはなかった。今でもその液体は全身の血管を駆け巡っている。体の細胞から少しずつ、ガブリエル・レイエスを消し去るかのように。

オーバーウォッチのスイス本部が爆破されてから一年が経とうとしていた。あの日の最後の記憶は、点火装置の光、身を焦がす灼熱、恐怖で見開かれたジャックの目。その直後に…… なにもかもが闇に包まれた。

目覚めて最初に見たものは、自分を見つめる冷たい瞳だった。モイラ・オデオレイン――レイエス自身がブラックウォッチに呼び寄せた、狂気の遺伝学者。彼女を仲間に引き入れたことで、あらゆる予期せぬ事が彼の身に降りかかることになった。モイラは意識が途切れ途切れのレイエスに、実験的な化学薬品を大量に注入したと説明した。それは肉体を煙に変化させる能力を与えてくれた薬品の強化版で、他に瀕死の彼を救う手立てはなかった、と。科学者らしい論理的な口調でそう語るモイラの真の動機は分からないが、レイエスは彼女が無抵抗の被験者を玩び楽しむ女であることを知っていた。

担架に横たわったレイエスは、体が絶えず状態を変え続けるなめらかに溶けた金属になったかのような、得も言われぬ離人感に襲われていた。肉体を取り戻したかと思えば、次の瞬間には黒煙になっている。細胞ひとつひとつの存在を感じる一方で、何もかも制御できなくなりそうな恐怖が迫ってくる。レイエスは自分の腕に視線をやる。それは、曖昧に形を成す黒い霧の激流に変わり果てていた。内心悲鳴を上げたくて仕方なかった。しかし同時に、頭のどこかでひどく興味をそそられたのも事実だ。今まで多くの人間に命を狙われてきた。危機を乗り越えるたびに、強くなり続けている実感がある。そしてさらに、これまでの自分を超えたのだ。過去の記憶も、これから始まる血塗られた復讐劇の悲惨な序章にすぎないのだろう。

タロンのドロップシップが降下を始め、レイエスの白昼夢は終わりを告げた。 ゆっくりとリーパーのマスクを下ろすと、傷つき歪んだ顔が影で覆われる。マスク は小気味のいいカチリという音とともに、首元に下ろしてあるフードに接続され た。深く息を吸う。シュー、と氷や金属を思わせる音が鳴った。

「作戦エリアまで一分三十秒」

ドロップシップのパイロットの報告を聞きながら、レイエスは船内の通信ステーションに並ぶモニターに向かう。LEDパネルに指を滑らせ、ドゥームフィストが用意した任務の概要に目を通した。

まもなく秘密軍事施設に着陸する。そこにはタロンの任務を次の段階に進めるための知識を持った人物がいる。その男を必ず生きたまま施設から連れ出せ。任務のパートナーは非常に有能だ。だがそいつから目を離すな。私が収監されている間、 貴様が私の手となり動け。

アカンデの牢の前で笑みを浮かべた記憶がある。無表情で見つめ返す彼の顔には、一切の感情がなかった。自分を捕らえ悦に入っているような男など眼中にないとばかりに、監獄の壁すら貫くような視線だった。

レイエスは些細なことは気にしないし、必要以上の復讐心に溺れるような男でもなかった。それでも、世界屈指の影響力を持つ犯罪者が鉄格子の向こうにいること、そして自分がその逮捕の一端を担ったことには多少の満足感を覚えていた。

「新しい家はどうだ?」

レイエスが尋ねる。

問いかけられたアカンデは、他の誰にも聞こえない会話を邪魔されたかのように まばたきをしてから、肩をすくめた。

「逆境は好機を生み…… 乗り越えれば、さらに強くなれる」

レイエスは歯を食いしばり、きつく拳を握った。そうでもしなければ彼に対する 罵詈雑言が飛び出していた。アカンデはそんな彼の仕草を訳知り顔で観察する。

「腐敗した権力者や反乱者に正しく対処できない社会制度に苛立っているのだろう?」

アカンデの発言は質問ではなく、確認するような口ぶりだ。

レイエスは口を開かず、しかめっ面で返す。

アカンデは身を乗り出す。その表情は自分の手札で勝てるかどうかを見極めてい

るポーカーのプレイヤーのように用心深い。

「貴様も私も戦士だ。偽りの平和に騙されるわけがない。だが心配するな。こちらは圧倒的に不利な状況だ――」

「妥当な報いだ」

レイエスが口を挟む。

「貴様はそう思うかもしれない。だが世界の体制に疑問を抱いたのは私が初めてではないし、最後でもない。世界がどれほど壊れているか、気づいている者は多いものだ!

「完璧な体制など存在しない。テロリズムに走らずとも、その欠点を認識する ことはできる」

アカンデはレイエスの言葉にうやうやしくうなずいてから、視線を外した。

「真の悪人は決して捕まらない。実に残念だと思わないか。貴様は警官も兵士も 経験して、正義を追い続けてきたのだろう? その結果、正義がいとも簡単に売り買 いされる事実に行き着くなんてな!

その言葉にレイエスは立ち上がり、その場から去ろうとする。

「俺を操ろうってんなら無駄だ。俺は道に迷ってカルトのリーダーに救いを求めるような人間じゃないからな。貴様がここにいるのにはそれなりの理由がある」

「それはお互い様だろう、レイエス」

二人の間に沈黙が流れる。普通ならこの後に続くのは握手か、拳銃の早抜きか。 「ひとつ聞かせてくれ」

アカンデが声をかける。

「貴様は何かを成し遂げられたと思うか? 警官や兵士…… そしてオーバー ウォッチのエージェントとして、正義の秤を傾けられたか?」

レイエスは答えようと口を開いたが、胸の奥底で何かがつかえて言葉が出てこない。警官時代には何百人もの犯罪者を逮捕してきた。それでも街の犯罪がなくなることはなかった。軍では非人道的な独裁政権を倒す一助を担ったものの、その後を引き継いだ巨大企業は最大限の利益を上げるためという名目のもと、かつての政権と同じ暴虐を続けた。レイエスは過去の仲間の多くと違って、不正の原因を根本から断たなければならないと信じていた。カルテルを解体しなければ違法薬物の売人を逮捕してもしかたがない。そもそも独裁者に地位を与え、好きにさせていた者を突き止めないまま国を救っても意味はないのだ。

レイエスはたびたび、罪なき人々がエリートと呼ばれるような人間たちに踏みに じられる様を見てきた。彼らを追及する者はいなかったし、社会は人々に正義も、



安心感も、身の安全さえも与えなかった。

アカンデは話を続ける。その口調は厳粛で、相手を評価するものでも批判する ものでもない。

「貴様はがむしゃらに働き続け、肉体を歪めてまで善なる世界のために尽くしてきた。その末に、何が残った? この世界の仕組みは、欠陥のある体制というわけではない。分断を生み出し利益を得る犯罪者が報われ、守られるよう意図的に作られている。そこでひとつ聞きたい。貴様が守っているのは一体誰だ? 私から人類を守っているのか? それとも、犯罪者どもを私の正義から守っているのか?」

レイエスはその問いかけに返答できなかった。

アカンデの言葉は誰にも――国連、ICPO、アメリカ司法制度にさえ否定できない真実を語っていた。体制のしがらみによって手が出せない不正を正すべく、共に秘密作戦部隊を結成するに至ったオーバーウォッチも、彼を否定できない。

レイエスの心に復讐の種が植え付けられたのは、この時のことだ。その種が芽吹き、リーパーを生み出した。それは陳腐化した名誉などではなく、この世界が唯一尊重する規範、暴力を信奉する亡霊だった。

「音声をマスクの通信システムに切り替える」

ドロップシップのパイロットの声が、過去の記憶に耽っていたレイエスの意識を現 実に引き戻した。

音声フィードのセキュリティを確認すると、空虚なビープ音が聞こえてきた。

「続けろ」

レイエスのHUDが光る。タロンのシンボルマークに代わって、点滅する紫色のドクロが表示された。

「オーラ、コンパドレ」

女性の声が耳に届く。

「電撃戦が始まるわ。準備はオーケー?」

ドロップシップが着陸したのだろう。足元の床が揺れた。レイエスは暗い出ロランプから外に出ながら、パートナーであるソンブラの姿を探す。ステルスを解除した彼女は自信満々の笑みを浮かべている。

レイエスは通信を切り、彼女に向き直る。

「隠密行動の回収任務のことか?」

「そう、ヒット・アンド・ランよ」

レイエスはソンブラを眺めながら、頭の中で彼女がもたらしうる不利な状況を チェックリストのように確認していった。白と赤の服はお世辞にも地味とは言えない。携えているマシン・ピストルでさえ、派手な装飾が施されている。とてもでは ないが彼女の佇まいから「隠密」という言葉は連想できない。

「今回のような任務は初めてか?」

レイエスがそう尋ねると、ソンブラは硬質光のスクリーンを表示させながら、鋭 く息を吐いた。あざけりと驚きの間、といったところだろう。

「心配なの、ガブちゃん? 大丈夫よ。そうだ、タロンの秘密をひとつ教えてあげよっか? うちは軍じゃないの、兵隊さん。そのうち嫌でも分かると思うけど」

「任務の資料には目を通したのか?」

ソンブラが硬質光スクリーンを投げてよこしてくる。

「これのこと? リサーチは自分でしたい派なのよね」

レイエスはショットガンの弾薬を確認しながら、怒りがふつふつと湧き上がるの を感じていた。

「指示通りに行動できなければ、安全な帰還は確保できんだろう」 そう言われた相手は、肩をすくめながら画面を閉じる。 レイエスはドアに向かう。

「戦闘準備完了だ」

ソンブラもにんまりと笑い、ピストルを額のそばに掲げる。相手を挑発するような敬礼。

二人が峰の頂に達すると、満月に照らされた背の高い針葉樹と低木の森があたり一面に広がっている光景が目に飛び込んできた。平たい丘の上には、特徴のない建物が見える。いずれもページュ色の一階建てで、馬蹄のような形を作るように並んでいた。ソンブラが口を開く。

「あそこにターゲットがいるってわけ」

一方のレイエスは辺りを静かに見渡し、地形に隠された防衛システムがないかを確認する。彼は今まで数え切れないほどの秘密軍事施設に侵入してきた。そうした施設でよく使われる監視システムや、警報装置は熟知していた。妙な位置に設置された旗竿や、砂漠で自生しているにしては青々としすぎている茂みが不規則に並んでいないか探す。

「監視網はたいしたことないな。谷底までは俺についてこい――」

そう言って振り向いたレイエスの目に写ったのは、谷の向こうにトランズロケーター・ビーコンを投げるソンブラの姿だった。彼女はそのまま姿を消し、瞬時にそちら側の丘の上に現れる。ソンブラが目の前から消えたという衝撃は、すぐに苛立ちでかき消された。マスクの下で歯を食いしばりながら、レイエスはドゥームフィストの警告を思い起こす。

日を離すな。

彼はソンブラの隣の空間に集中する。心拍数が急上昇し、肌が粟立つ。そのまま 煙になってかき消え、彼女の隣で実体を取り戻した。

ソンブラが到着した彼に、ひらひらと手を振る。

「お久しぶり」

レイエスは、彼女が自分の力に一切反応を示さなかったことに気づいた。 おそらく、彼女はこちらの能力を全て把握しているし、からかっていただけなのだろう。 自分を過信した者のくだらない遊びだ。

ドゥームフィストからソンブラの能力について聞かされたとき、確かに世界屈指 の危険な工作員だと言っていた。まさか任務の遂行に支障をきたす危険性まではら んでいるとは。考えてもみなかった展開だ。

「ちゃんとついてきてよ、アミーゴ。あなたがただの傭兵だってのは知ってたけ ど、そこまでガチガチだとは思わなかったわ。ねえ、別行動しない? 私がターゲッ トのところに行くから、あなたは見張りを――」

「別行動は許さん」

言葉を遮られたソンブラはため息をつく。

「ペンタゴンに侵入するわけでもあるまいし……。最寄りの増援部隊は49キロも離れてるのよ。ここは存在するはずのない施設なの。情報によると、物資を運ぶトラックもめったに来ない。警備の人員だって最低限…… 予算削減のせいで、今いるのは30人だけ。その上、向こうは侵入されるとも思ってない。あいつらが持ってるような銃じゃ、タロン部隊のアーマーは貫けない。ここは秘密の施設だから地元の保安官だって管轄外よ。そんなこと、もう知ってるんでしょうけど」

「二人で行動する。そのほうが抵抗されたときに無力化するのが楽だ」 ソンブラは片眉を吊り上げ「了解、コマンダー」と返してから、声を落とす。 「あなたのファイルを読んだけど、そんなタイプだとは思わなかったわ」

ソンブラが何を言わんとしているのか、レイエスには分からなかった。アカンデの警告のことを知っているのだろうか?

怒りの表情を読み取ったソンブラは、腰に手を当てて立つ。「心配しないでよ。 アカンデの指示には従う。今日は利害も一致してるし」

ちゃかすような笑みを浮かべながら、ソンブラは最も近い建物を指差す。

「ここから侵入ね。さっさと入って、さっさと終わらせましょ」

レイエスが彼女に指定された地点に目をやっている際に、彼女の姿は見えなくなっていた。

長年の軍事経験の賜物か、レイエスは危険を察知する第六感のようなものを身につけていた。それが、すべての感覚を通じて警鐘を鳴らしている。不安を掻き立てているのは任務そのものではなく、タロン内の力関係…… 厳密にはそれが欠如している点だった。似通った思想を持つ犯罪者たちの集団であるタロンが、軍隊のような仕組みを取り入れると考えるほど、レイエスはうぶでも愚かでもない。それでも、ソンブラと組んで動くのはどうにも落ち着かなかった。組む相手が自分のことをどう思っていようと、任務のために背中くらいは守ってくれるものだと考えていたのだ。

ところがソンブラは自分のことも、任務のこともどうでもいいかのように振る舞う。アカンデのことすら気にかけていないようだ。レイエスは、タロンに信頼できる人物はいるのだろうか、という不安に襲われた。脳裏に嫌な考えが浮かぶ。

アカンデはソンブラを見張っていろと言った。ソンプラには何と伝えたのか? 「ハッキング開始」 最初の建物の日焼けした扉に近づくと、ソンブラが言った。

二人の左、数メートル離れたところに、小さなカメラが地面に埋められていた。 それに気づいた頃には、警報のクラクションが静寂を切り裂いていた。動作感知装 置だ。

初歩的なミスだ。

複数の建物の扉が開き、重装備の警備兵が銃を構え土埃を上げながら谷になだれ込んでくる。

数えるに、10名ほど。マスクの下でレイエスの表情が緩む。悩ましいことに、 引き金を引くたび少しだけ平穏を感じ、怒りがなりを潜めた。

バン!バン!バン!

警備兵が鈍い音を立てて倒れ込む。レイエスはゆっくりと前進していく。数秒もあれば全員始末できただろう。しかし彼は心のどこかで、彼らを殺すことを楽しんでいた――その感情はどんどん膨れ上がってきているものの、決して認めたくはないものだ。

残る二人がレイエスに銃口を向けているが、恐怖で固まって動けないようだ。一人目をすぐさま撃ち殺すと、もう一人が我に返ったように動き出す。警備兵が汗だくになりながら一発撃つと同時に、レイエスは煙に変わり彼の真後ろに現れた。ヘルファイア・ショットガンが後頭部に押し付けられるのを感じた相手は、レイエスが引き金を引く前に空を見上げた。

ソンブラが再び姿を表したレイエスをゆったりとした拍手で迎える。幸い、先程 の戦いで彼の怒りは多少削がれていた。

「雑な仕事をするな。お前の尻ぬぐいをする気も――」

「そう、それで?」

ソンブラは自分の爪を見つめている。

「素人と仕事をする気もない」

ソンブラは腰に手を当てたまま、レイエスに数歩近づく。反発心を隠そうとも しない。

「分かんないのね。連中がどのくらいの時間で反応するか調べなきゃいけなかったの。今のは通信ターミナルをハッキングしてる間、あなたを囮にしただけ。内部ネットワークをダウンさせたから、あいつらはもう外部と通信できない。あなたが遊んでる間にターゲットの居場所も分かったし」

まくし立てるように言うと彼女はそのまま踵を返し、近くの建物に入っていって しまった。レイエスはマスクの下でブツブツと何かつぶやく。 ゆっくりではあるも

彼女の言う通り、今は全員の利害が一致して しるからなん亡か機能しているのだろう。 しかし、この状態がいつまでも 続く亡は思えない。

のの、失ったはずの辛抱強さの備蓄を発掘しつつあった。

ソンブラは赤い灯りが点滅する長い廊下を軽やかに歩み、レイエスはその後を追う。再び端末をハッキングした彼女はそれを使って更にセキュリティ網を無効化していく。ほんの数秒で赤い警告ランプは消えた。屋内はオフィスのような、無味乾燥な蛍光灯に照らされている。

「『荷物』は地下2階よ。こっちに階段がある。地下ではもう少し抵抗されるで しょうね」

「おい…… 指揮系統って言葉、知ってるか?」

「またその話? ワンパターンね」

「相手に分がある、能力も小細工も使えないような実戦では、命令に従えるかど うかが生死を分かつんだ」

「私、命令って概念が嫌なの」

「ドゥームフィストの命令でここに来たんだろう」

ソンブラは再びため息をつく。

「よーく聞いて。タロンにいる理由はそれぞれよ。あなたみたいに、他に居場所がないって人もいるけど、タロンのリソースが目当てって人もいるし、リーダーを信じてる人もいる。今は思想と意志と資産を持ってるドゥームフィストが覇権を握ってるけど、明日にはリーダーが変わってるかもしれないし、変わってないかも

しれない。だから私も都合がよければ命令に従うけど、今はよくないから従わない。分かる?」

二人は沈黙したまま階段を降りる。レイエスはソンブラの言葉を反芻している。 彼女は心地悪い真実を突き付けてくるようだった。たとえば、モイラは所属している組織を食い物にする。研究資金さえ確保できるなら、善の側にも悪の側にもつく女だ。アカンデは新たな世界秩序を築こうとしている。それはレイエスをタロンに惹きつけたものでもあった。声を上げられぬ者たちの声となり、貧困の壁を打ち壊す破城槌となり、地位の低いものを踏み台にして富を手にしたエリートの顎を砕く拳となれる、という話だった。

ソンブラもまた、彼女なりの目的を持っている。それが何なのかはまったく見当もつかない。彼女の言う通り、今は全員の利害が一致しているからなんとか機能しているのだろう。しかし、この状態がいつまでも続くとは思えない。

その時になったらどうすべきか。答えは一見すると単純なものだった。

味方の弱点を掌握し、操るか排除するまで。

先を行くソンブラが階段につながる扉を開く。手すりからゆっくりと身を乗り出すと、暗い地下に続く階段が見える。レイエスもすぐに続いた。ショットガンの引き命に指をかけている。

「なにもなし」

そう言ったソンブラの耳元を銃弾が飛んでいく。

暗闇の中から自動小銃を撃ち込まれたソンブラは大声で口汚く罵る。レイエスが 駆け出すと同時に、ソンブラはステルス状態になり、階段を下りていった。

手すりを飛び越え、階段の吹き抜けに飛び込む。重力が体を引っ張るのを感じながら、ヘルファイア・ショットガンをホルスターから抜き、内なる怒りに身を任せた。落ちる速度が速まるほど興奮は高まり、邪悪な笑いがこみ上げてくる。マスクの通信システムによって増幅された笑い声は、不気味に響く。レイエスは目にも留まらぬ速さで実体化を繰り返しながら、花を咲かせるかのように銃口を光らせる。

彼は一階層通りすぎるごとに、階段にいる警備兵を全員無力化していった。ド スンと下層に着地すると、ちょうどソンプラもステルスを解除しているところだった。

「次は周囲をしっかり確認しろ」

武器をしまいながら、苦言を呈する。

「調子に乗らないでくれる? 私みたいなののおかげで食いっぱぐれずに済んでるくせに」

煙が晴れると、巨大な金属製の扉が現れる。すぐそばの壁には、小さな長方形の端末が埋め込まれている。ソンブラが手早くそれをハッキングすると、ドアが開くとともにパキッ、シュー……と空気が抜けるような音が聞こえてきた。

レイエスはソンブラを押しのける。「催涙ガスだ…… レールガンで撃ってくる」

キャニスターは階段の狭い踊り場まで飛び、壁にぶつかりながらガスを撒き散らす。ソンプラはよろけながら廊下に進み出る。そこはすでにガスマスクを装備した歩兵でいっぱいになりつつあった。彼女はぎゅっと目をつむると何らかの武器を起動させた。体から紫色の光の波が発生し、爆発するかのように大きな三日月形に廊下の先まで駆け抜けていく。兵士は足を止め、ライフルを揺すっている。引き金を引いても何も出てこないようだ。

EMPか、なるほどな。

レイエスはこの隙に乗じ、恐怖に目を丸くする兵士たちを吹き飛ばした。

戦闘をレイエスに任せたソンブラは、建物の換気システムを起動して屋内全体の 排気および再生利用を開始する。ガタガタと稼働音が鳴り響き、毒ガスがみるみる 吸い出されていく。振り向くと、レイエスが死体をじっと見つめていた。

兵士も警備員も、かつての自分と同じであったことを忘れてしまいがちだったが、考えてみればそれぞれに人生がある。

「昔」の記憶が再び押し寄せてくる。アイスクリームとすりむいた手の甲。エコーパークの通り沿いのジャカランダ並木…… しかしその記憶は、耳覚えのある声によってかき消される。

貴様が守っているのは一体誰だ? 私から人類を守っているのか? それとも、犯 罪者どもを私の正義から守っているのか?

「毎回こうなのか?」

ソンブラの視線を感じたレイエスが尋ねる。

「まあね。私は自分で考えて行動できるの。判断力を曇らせるトラウマなんか ないから」

ソンブラの口撃はレイエスの腹の中に渦巻く怒りを蘇らせた。

「尻ぬぐいを楽しんでね。清掃員さん」

生意気な物言いに対してつい昔ながらの説教をしたくなるのをぐっとこらえている間に、ソンブラはデタラメなハンドサインを出しながら先に行ってしまった。彼をちゃかし、軽蔑しているのは明らかだった。

目的地に近づきながら、レイエスは歯を食いしばる。そして放射線量の急激な変

化を知らせる周囲の警告に気が付いた。

ソンブラが振り返り、いたずらっぽい視線を投げる。

「アカンデがあなたを選んだ理由が分かる気がする」

呆れたような唸り声を返す。

「今どき、本物の忠誠心なんて金じゃ買えない。特にこの業界じゃね。黄金と同じくらいの価値がある」

自分を挑発して限界を迎えさせようとしている。見え透いた手だ。彼女が自分を操ろうとしているのは分かっているものの、無視するだけの自制心はなかった。 瀕死の重傷を負い大量の毒物を注入された影響か、スイスを出てから怒りを制御するのが難しい。

勘弁してくれ、と唸り声を上げる。

「おしゃべりしてるだけでしょ。チームとの信頼関係を築いてるの。覚えてる? オーバーウォッチでやってたことよ」

レイエスはマスクに隠された眉をひそめる。聞きたくない言葉だった。怒りがどくどくと血管を流れていく…… そうしているうちに、二人は暗い通路に近づいていた。突き当りにはエアロックが見える。

「いよいよね。ターゲットはこの向こうにいるわ」

ハッキングされたドアのセキュリティ端末は、二人を自動音声で迎えた。

「重力を扱う実験が行われている場合があります。量子力学チェンバーへご入室 の際にはご注意ください。衣類や武器、持ち物はしっかりと固定してください」

「お先にどうぞ」

ソンブラが軽く会釈する。

開いたドアの先には予想よりも大きなラボが広がっていた。部屋は八角形に近い 形状だ。壁には無数の光ファイバーケーブルで繋がったコンピューター群が埋め込 まれている。床を這うケーブルは部屋の中央にある土台に繋がり、巨大イカのサイ ボーグを思い起こさせた。

「ああ、いたわよ」

歌うようなソンブラの声がする。

土台の上では、老年の男が二つの球体型装置の前で背中を丸めている。球体は標準仕様のグレネードより少し大きいぐらいだ。男のはげ上がった頭が、鋭く尖った 鷲鼻と骨ばった顔つきを強調している。

レイエスが近づいていっても、男は二人に反応しなかった。そもそも部屋に誰か 入ってきたのを認識しているかどうかも怪しい。レイエスの視界に、ラボの向こう 側にある一番大きなコンピューター群に駆け寄るソンブラの姿が写った。大量のモニターの前に置かれた椅子に腰掛けている。モニターが光り始める。メインフレームへのハッキングを行っているのだろう。

「時間の亀裂は鐘のように響くが我々の耳に届くことはない。しかし重力の印象は時間を歪める。水が音を歪ませるように。それでも鐘は鳴る……」

男が口を開く。その言葉は誰かに邪魔されたかのように尻すぼみになっていた。 男は微笑み、作業場の近くにあるレバーを引いた。二つの球体を落とすと、中央 のステーションがパズルのように開く。その中には一定のリズムで明滅する、さら に大きな球体がもうひとつ。

レイエスの視線はその大きな球体に吸い寄せられた。

「あいつは……」

男性は装置の表面を優しくこすっている。その指先は明滅する光で照らされていた。

「実験が失敗して心が壊れちゃったそうよ。あれはパズルのピースがどうはまってたか、思い出そうとしてるだけ。あなたと一緒ね?」

ジャブのような言葉を無視しようとしていたレイエスの首元がぴりぴりとし始めた。廊下に再び兵士が集まりつつある。出入り口の端末をショットガンで撃ち抜く。端末は沈黙し、作動したセキュリティプロトコルによって扉が封鎖された。

「ロックをかけなかったのか?」

「あなたがちゃんと対処してくれたでしょ?」

画面から目を離さないままのソンブラが答える。ターゲットの資料を開いているようだ。

「シーブレン・デ・カイパー博士、オランダ国籍…… ああ、あった。どうして アカンデがこの人と会いたがってるか分かったわ」

ドアを叩く音がどんどん大きくなっていく。さすがに声は聞こえないものの、 エネルギー砲や重火器が鋼鉄の扉に襲いかかる衝撃音は室内まで響いてくる。その 音は、レイエスに失敗した数少ない任務を思い起こさせた。一時撤退しながら、遠 くから雷鳴のように響いてくる敵の銃声を聞いた記憶がある。心の奥深くで、後悔 と挫折感がふつふつと沸き起こる。毎刻、どんどん炎が大きくなっているような気 がした。

もう辛抱できない。自分のような手腕と経験を持つ人間が、どうしてタロンの 使い走りのような仕事をしなきゃならない。引き金を引くだけなら誰にでもできる が、極秘任務を完遂するには狡猾さが必要だろう。扉が叩かれるたびに、レイエス 激情や憎悪や怒りのさらに奥深くから、 別の声が聞こえてくる。それは揺るぎなく、 今の自分を見直すべきだ亡しイエスに告げる。 吹きすさぶ敵意の吹雪の中残った、 消えゆく思いやりの燃えさしだった。

の怒りはどんどん制御できなくなっていった。

こいつらだけじゃ何もできないから、ドゥームフィストに雇われたのか? レイエスは一線を越え、過去の人生を捨ててまで、不誠実な世界に正義をもたら そうと毒蛇の巣に踏み込んだ。いったい何のために? ただの傭兵に成り下がるた めだったのか?

「もういいだろう、さっさと荷物を回収しろ!」

「ダメよ、コレが私の報酬なんだから。私にとっての通貨は情報なの。あと数分で終わるから我慢して」

軽薄な返答だ。

「長居しすぎた。そろそろ増援が到着するだろう。粘るほど無事に脱出するのが 難しくなるぞ」

「まったく…… いっつもそんな感じなのね。ジャックにもそうやって監督されてたの?」

その一言で、レイエスの中にわずかに残っていた自制心が全て砕け散った。彼は 怒りに任せて部屋の向こう側に黒い嵐のように押し寄せ、ショットガンを抜く。

目の前の端末を吹き飛ばされたソンブラは、燃える破片を避けながら彼を罵倒する。

一方のデ・カイパー博士は相変わらず反応せず、光る球を優しくなで続けている。

ソンブラはレイエスの方へ椅子を蹴飛ばすが、ちょうどいいタイミングで振り下 ろされたショットガンで防がれた。

「最悪。言ったでしょ――あなたと同じで、私は私なりの理由があってここにいるの」

レイエスは威圧するように彼女に近づく。

「他の所にいたいって気持ちも分かるわよ…… エコーパークのバンガローなんて素敵じゃない?」

ソンブラがステルス状態に入った。しかし、レイエスは彼女の攻撃パターンの分析を終えていた。相手の利き手に応じて十一時か一時の位置に現れる傾向がある。深呼吸をしてショットガンを構えると同時に、ソンブラの顔が視界に飛び込んできた。

「これって膠着状態ってやつよね」

彼女は銃身でコツコツとレイエスのマスクを叩いた。

そのままの状態で数秒が過ぎた。レイエスの頭の片隅に、様々な記憶が流れ着く。昔の生活の優しい思い出と、今の苦しみに満ちた儀式のような生活という、相反する記憶がないまぜになっている。

激情や憎悪や怒りのさらに奥深くから、別の声が聞こえてくる。それは揺るぎなく、今の自分を見直すべきだとレイエスに告げる。吹きすさぶ敵意の吹雪の中残った、消えゆく思いやりの燃えさしだった。

懐かしい声が彼に、あなたらしくない、と呼びかける。レイエスが目を閉じると――芝生で覆われたエコーパークの遊歩道を一緒に歩くマルティナの笑顔が浮かんだ。手に持っているアイスクリームが溶けて、擦りむいた手の甲に滴る。誕生日用のバルーンを掴もうと木を登ったときにできた傷だ。幸せな時間だった。レイエスは甘く香る彼女の香水や、抱きかかえている6歳の息子の重みの記憶に何とかしがみつこうとした。しかし、我に返った彼を迎えたのは鼻を突く火薬と燃える肉のにおいだった。

昔の人生は消えてないわ。あなたはまだやり直せる。

マルティナの顔が闇に溶けていく。代わりに見えたのはこちらをあざ笑うソン ブラの顔だ。

「で? どうするつもり?」

レイエスの人差し指がショットガンの引き金を滑っていく。目を細め、衝撃に備 えてしっかりと踏ん張る。

バン!

どちらも、顔の間近を通った銃弾の熱を感じた。ラボの奥にある電源コンソールが火花を散らし、爆発する。予備電源が作動し、ラボの照明がホタルのように点滅した。

「なんだ…… つまらない」

レイエスとソンブラが一歩ずつ下がると同時に、ウィドウメイカー率いるタロンの部隊がラボに踏み込んできた。外で扉を叩いていた警備部隊の死体が積み上げられているのが見える。レイエスは廊下の物音が止んだことには気づいていたものの、撤退したか作戦を変えたものだと思っていた。タロン兵が時計仕掛けのようにデ・カイパー博士に駆け寄り身柄を確保するのを眺めながら、納得したように心の中でうなずく。

「バカな人たち」

レイエスがフランス語を理解しなくとも、ウィドウメイカーの言わんとしている ことは明らかだった。

「アカンデから、道は切り開かれていると聞いてたわ。そこに関しては礼を言うけれど…… 今回は素人には任せられない」

「バックドアは常に用意しておかなきゃね」

ピストルを収めながらソンブラが口を開く。

「そうだ、タロンについてもうひとつイイコト教えてあげる…… ドゥームフィストは、必ず保険をかけるの」

レイエスはウィドウメイカーやタロン兵のそばをさっさと通り過ぎる。ソンブラ を一瞥するために足を止めると、彼女は笑顔を浮かべた。

「さよなら、清掃員さん」

レイエスは施設の暗い廊下を歩き、来た道を戻っていく。壁の銃痕や、へこんだ階段も通り過ぎる。床に転がる警備兵の死体に気づいた彼は、視線を向ける。彼らの 目は救済を求めるように見開かれているが、それは決してやってこない。

足で死体をひっくり返し、ユニフォームのネームプレートを確認する。ドーソン。カーリー。ピーターソン。サンドボーン。ジェイコブス。世界のどこかに、この人たちからの電話を待つ両親や、眠る前に母親の声を聞きたがっている少女や、裏口で主人の帰りを待っている飼い犬がいるのだ。

レイエスは自分が一線を越えたことを理解していた。もはや自分はテロリスト

タロン亡はいったい何だ? それは手段に過ぎない。

無節操な者たちのメスを砕く、大剣だ。 暴力亡いう規範に従う、リーパーの領域だ。

を批判できる立場ではない。かつての彼は、すべてのテロリストは最終的に自分を ヒーローや暴政と戦う活動家だと信じている、社会に染み付いた腐敗と欲望に対し て正義という反旗を翻しているのだ、と主張していた。勇敢さと正義のための犯 罪行為の境界線は非常に曖昧なものだが、彼はそれを自らの意思で越えてしまった のだ。

基地を出たレイエスは、ウィドウメイカーとその部隊がデ・カイパー博士を別のドロップシップに乗せるのを眺めた。幾度も回収任務を成功させてきた彼は、ほとんどのターゲットを味方や冷ややかな正義の元に送り届けてきた。しかし、時にはターゲットが思い出したくないほどの恐ろしい末路をたどったこともあった。

今回はどちらの結果になるのだろうか。

デ・カイパー博士を2隻目のドロップシップに乗せ終えたウィドウメイカーとタロン兵たちが船内に消えていった。残されたのは、皮肉な笑みを浮かべてこちらを見ているソンブラだけだ。わざとらしく彼に手を振り、別れを告げる。

「心配しないで、ガブちゃん。すぐにタロンでの居場所が見つかるわ」 彼女もドロップシップに乗り込む。扉が閉じる直前、さらに一言投げかけてき た。

「アカンデにひざまずくことになったとしてもね」 自分のドロップシップに戻り、離陸したレイエスは考えに耽る。 タロンとはいったい何だ?

彼らは軍隊でも秘密結社でもない。もちろんオーバーウォッチともブラック ウォッチとも違う。どちらの組織も、かろうじて家族意識や互いに尊重し合う精神 を持っている。チームメイトは共に食事をし、様々な経験を共有し、共通の目的を 持っていた。

しかしそれもまた人心操作の一種ではなかろうか。仲間意識を通じて誘惑されていたのでは? 一方のタロンには、偽りの調和というものは存在しない。それぞれの動機は自己中心的ではあるが、純粋だ。彼らの行動はとがむべきだが、決定的なものでもある。レイエスはなぜか不正を働く側を守ろうとする「文明」の定めた法からは解放されたのだ。

これからは国連の官僚主義を気にする必要もなければ、真の悪を訴追するのを邪魔するものもなくなった。主権という境界線なく、世界をよりよくするために必要なものを手に入れられるようになった。

タロンとはいったい何だ?

それは手段に過ぎない。

無節操な者たちのメスを砕く、大剣だ。

暴力という規範に従う、リーパーの領域だ。

心の奥で何かが呼んでいる。かすかに燻っていた思いやりの残り火が消えつつ あった。レイエスは片方のグローブを外し、マスクを上げる。乾いた空気が縮れた 肌を刺すように刺激する。彼は顔をしかめた。

ゆっくりと指先で自分の顔をなぞってみる。神経が壊死しているせいで強めに押 さなければ何も感じられない。

彼女に会ってももう分かってはもらえないだろう…… 俺自身も自分が分からないくらいだ。

ドロップシップの床につばを吐きマスクを被り直す。他に考えるべきことは何も 残っていなかった。

過去の人生が、黒煙の中に沈んでいく。その下にある、底なしの激情に飲み込まれてしまったのだ。もはや友情もほしくなければ、愛情もいらない。大事なのは正義を求める心だけだ。それはドゥームフィストがこの壊れた世界を直すために必要なもの。

今のレイエスが、唯一差し出せるものだった。